

2023年度(2024年3月31日現在)貸借対照表

(単位:百万円)

科 目	金 額	科 目	金 額
( 資 産 の 部 )		( 負 債 の 部 )	
現 金 及 び 預 貯 金	3,336	保 険 契 約 準 備 金	40,588
預 貯 金	3,336	支 払 備 金	2,516
買 入 金 銭 債 権	3,501	責 任 準 備 金	38,072
有 価 証 券	30,460	代 理 店 借	556
社 債	14,718	再 保 險 借	7,034
株 式	205	そ の 他 負 債	2,351
外 国 証 券	11,785	未 払 法 人 税 等	8
そ の 他 の 証 券	3,751	未 払 金	626
貸 付 金	874	未 払 費 用	1,274
一 般 貸 付	874	預 り 金	89
有 形 固 定 資 産	245	金 融 派 生 商 品	309
建 物	83	リ ー ス 債 務	0
リ ー ス 資 産	0	資 産 除 去 債 務	24
建 設 仮 勘 定	5	仮 受 金	18
そ の 他 の 有 形 固 定 資 産	155	退 職 給 付 引 当 金	1,098
無 形 固 定 資 産	8,027	価 格 変 動 準 備 金	98
ソ フ ト ウ ェ ア	8,026	負 債 の 部 合 計	51,728
そ の 他 の 無 形 固 定 資 産	1	( 純 資 産 の 部 )	
再 保 険 貸	14,268	資 本 金	7,500
そ の 他 資 産	3,927	資 本 剰 余 金	3,182
未 収 金	2,899	資 本 準 備 金	2,540
前 払 費 用	786	そ の 他 資 本 剰 余 金	642
未 収 収 益	131	利 益 剰 余 金	5,380
預 託 金	34	利 益 準 備 金	14
金 融 派 生 商 品	17	そ の 他 利 益 剰 余 金	5,366
仮 払 金	53	繰 越 利 益 剰 余 金	5,366
そ の 他 の 資 産	5	株 主 資 本 合 計	16,063
繰 延 税 金 資 産	2,066	そ の 他 有 価 証 券 評 価 差 額 金	△783
貸 倒 引 当 金	△1	繰 延 ヘ ッ ジ 損 益	△301
		評 価 ・ 換 算 差 額 等 合 計	△1,084
		純 資 産 の 部 合 計	14,978
資 産 の 部 合 計	66,707	負 債 及 び 純 資 産 の 部 合 計	66,707

## 注記事項

(貸借対照表関係)

### 1. 重要な会計方針に関する事項

#### (1) 有価証券の評価基準及び評価方法

有価証券(現金及び預貯金・買入金銭債権のうち有価証券に準じるものを含む)の評価は、その他有価証券については、3 月末日の市場価格等に基づく時価法(売却原価の算定は移動平均法)によっております。

子会社株式(保険業法第 2 条第 12 項に規定する子会社が発行する株式をいう)については原価法によっております。

なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

#### (2) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引の評価は時価法によっております。

#### (3) 有形固定資産の減価償却の方法

有形固定資産の減価償却の方法は、次の方法によっております。

・有形固定資産(リース資産を除く)

定額法を採用しております。

・リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

なお、その他の有形固定資産のうち取得価額が 10 万円以上 20 万円未満のものについては、3 年間で均等償却を行っております。

#### (4) 無形固定資産の減価償却の方法

無形固定資産の減価償却の方法は、次の方法によっております。

・ソフトウェア

利用可能期間に基づく定額法によっております。

・その他の無形固定資産

利用可能期間に基づく定額法によっております。

#### (5) 外貨建資産等の本邦通貨への換算基準

外貨建資産は、決算日の為替相場により円換算しております。外貨建その他有価証券の換算差額は、為替による影響も含めてその他有価証券評価差額金として処理しております。

#### (6) 引当金の計上方法

##### ①貸倒引当金

貸倒引当金は、債権の貸倒れによる損失に備えるため、資産の自己査定基準及び償却・引当基準に則り、個別に見積もった回収不能額及び貸倒実績率に基づき算出した金額を計上しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に則り、所管部署及び当該部署から独立した部署が査定を行い、その査定結果に基づいて引当を行っております。

##### ②退職給付引当金

退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務の見込額に基づき、計上しております。当社は退職一時金制度の改定により、2014 年 6 月 1 日時点で在職する支給対象者について、支給額を確定し、退職時に支給するものとしております。

なお、「退職給付制度間の移行等の会計処理に関する実務上の取扱い(実務対応報告第 2 号)」を適用し、引き続き「退職給付引当金」として計上しております。

2019 年 4 月 1 日より新たな退職給付制度を採用しております。その退職給付債務並びに退職給付費用の処理方法は次の通りです。

退職給付見込額の期間帰属方法 給付算定式基準

数理計算上の差異の処理年数 5 年

また、2022 年 4 月 1 日より子会社化に伴う転籍者の退職給付制度を引き継いでおります。当該退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、退職金規程に基づく期末要支給額により計上しております。

さらに、2022 年 4 月より執行役員に対し退職給付引当金を積み立てております。当該退職給付引当金は内規により積み立てられるもので、2019 年度分より支給月額総額に役位ごとに定めた率を乗じた額を計上しております。

#### (7) 価格変動準備金の計上方法

価格変動準備金は、保険業法第 115 条の規定に基づき算出した額を計上しております。

#### (8) ヘッジ会計の方法

##### ①ヘッジ会計の方法

ヘッジ会計の方法は、「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第 10 号)に従い、繰延ヘッジ処理を採用しています。

##### ②ヘッジ手段とヘッジ対象

為替予約をヘッジ手段とし、外貨建債券をヘッジ対象としております。

##### ③ヘッジ方針

資産運用に関する社内規程等に基づき、ヘッジ対象に係る為替変動リスクを一定の範囲内でヘッジしております。

##### ④ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジの有効性の判定は、ヘッジ対象とヘッジ手段の時価変動を比較する比率分析により行っています。

#### (9) 収益の計上方法

当社は他の保険会社と保険募集の委託及び再委託に関する契約を締結しており、保険契約の締結代理業務及び事務の代行業務を行っております。これらの業務が発生した時点又は発生した期間において、他の保険会社が保険契約に対する支配を獲得し、履行義務が充足されると判断していることから、保険契約の締結代理業務及び事務の代行業務が発生した時点又は発生

した期間に応じて収益を認識しております。取引の対価は履行義務を充足してから1年以内に受領しており、重要な金融要素は含まれておりません。

(10) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。ただし、資産に係る控除対象外消費税等のうち、税法に定める繰延消費税等については、前払費用に計上し5年間で均等償却し、繰延消費税等以外のものについては、発生年度に費用処理しております。

(11) 責任準備金

期末時点において、保険契約上の責任が開始している契約について、保険契約に基づく将来における債務の履行に備えるため、保険業法第116条第1項に基づき、保険料及び責任準備金の算出方法書（保険業法第4条第2項第4号）に記載された方法に従って計算し、責任準備金を積み立てております。

責任準備金のうち保険料積立金については、次の方式により計算しております。

①標準責任準備金の対象契約については、金融庁長官が定める方式（平成8年大蔵省告示第48号）

②標準責任準備金の対象とならない契約については、平準純保険料式

なお、責任準備金については、保険業法第121条第1項及び保険業法施行規則第80条に基づき、毎決算期において責任準備金が適正に積み立てられているかどうかを、保険計理人が確認しております。

責任準備金のうち危険準備金については、保険業法第116条及び保険業法施行規則第69条第1項第3号に基づき、保険契約に基づく将来の債務を確実に履行するため、将来発生が見込まれる危険に備えて積み立てております。

(12) 既発生未報告支払準備金の特別な積立方法

既発生未報告支払準備金（まだ支払事由の発生の報告を受けていないが保険契約に規定する支払事由が既に発生したと認める保険金等をいう。以下同じ。）については、新型コロナウイルス感染症と診断され、宿泊施設または自宅にて医師等の管理下で療養をされた場合（以下「みなし入院」という。）等に入院給付金等を支払う特別取扱を2023年5月8日以降終了したことにより、平成10年大蔵省告示第234号（以下「IBNR告示」という。）第1条第1項本則に基づく計算では適切な水準の額を算出することができないことから、IBNR告示第1条第1項ただし書の規定に基づき、以下の方法により算出した額を計上しております。

（計算方法の概要）

IBNR告示第1条1項本則に掲げる全ての事業年度の既発生未報告支払準備金積立所要額及び保険金等の支払額から、みなし入院に係る額を除外した上で、IBNR告示第1条1項本則と同様の方法により算出しております。

なお、前事業年度末においては、当該みなし入院に係る額の代わりに、重症化リスクの高い方以外のみなし入院に係る額を除外しておりましたが、当事業年度中にみなし入院の入院給付金の取扱いを終了したことにより、当該みなし入院に係る額を除外して算出する方法に見直しております。

(13) 保険料等収入（再保険収入を除く）

保険料等収入（再保険収入を除く）は、収納があり、保険契約上の責任が開始しているものについて、当該収納した金額により計上しております。

なお、収納した保険料等収入（再保険収入を除く）のうち、期末時点において未経過となっている期間に対応する部分については、保険業法第116条及び保険業法施行規則第69条第1項第2号に基づき、責任準備金に積み立てております。

(14) 保険金等支払金（再保険料を除く）

保険金等支払金（再保険料を除く）は、保険約款に基づく支払事由が発生し、当該約款に基づいて算定された金額を支払った契約について、当該金額により計上しております。

なお、保険業法第117条及び保険業法施行規則第72条に基づき、期末時点において支払義務が発生したもの、または、まだ支払事由の報告を受けていないものの支払事由が既に発生したと認められるもののうち、それぞれ保険金等の支出として計上していないものについて、支払準備金を積み立てております。

2. 会計上の見積りに関する事項

(1) 繰延税金資産の回収可能性

① 当事業年度の財務諸表に計上した金額 2,066 百万円

② その他の情報

a. 算出方法

繰延税金資産は、税務上の繰越欠損金のうち未使用のもの及び将来減算一時差異を利用できる課税所得が生じる可能性が高い範囲内で認識しております。課税所得が生じる可能性の判断においては、将来獲得しうる課税所得の時期及び金額を合理的に見積り、金額を算定しております。

b. 主要な仮定及び翌事業年度の財務諸表に与える影響等

これらの見積りは将来の不確実な経済状況及び会社の経営状況の影響を受け、実際に生じた時期及び金額が見積りと異なった場合、翌事業年度以降の財務諸表において認識する金額に重要な影響を与える可能性があります。また、税制改正により実効税率が変更された場合に、翌事業年度以降の財務諸表において認識する金額に重要な影響を与える可能性があります。

(2) 責任準備金

① 当事業年度の財務諸表に計上した金額

責任準備金…38,072 百万円

責任準備金繰入額…2,670 百万円

② その他の情報

a. 算出方法

「1. 重要な会計方針に関する事項（11）責任準備金」に記載のとおりであります。

b. 主要な仮定及び翌事業年度の財務諸表に与える影響等

保険料及び責任準備金の算出方法書に記載された計算前提（予定発生率・予定利率等）が直近の実績と大きく乖離することにより、将来の債務履行に支障をきたすおそれがあると認められる場合には、保険業法施行規則第69条第5項に基づき、追加の責任準備金を計上する必要があります。

3. 金融商品の状況に関する事項及び金融商品の時価等に関する事項

(1) 金融商品の状況に関する事項

① 資産運用方針

保険業法第118条第1項に規定する特別勘定以外の勘定である一般勘定の資産運用については、安全性を第一義とし、流動性と収益性に留意しつつ、負債特性を考慮した健全な運用資産ポートフォリオの構築を図り、中・長期的に安定的な収益を確保することを基本的な方針としております。

② 運用資産の内容及びそのリスク

資産運用方針に基づき、具体的には預貯金、買入金銭債権、有価証券、貸付金により資産運用を行っております。買入金銭債権は、住宅ローンを裏付資産とする証券化商品に投資しております。有価証券は、その他有価証券として、社債、外国証券、不動産投資信託に投資しております。また、デリバティブ取引については、主として、外貨建て有価証券等に係る為替変動リスクをヘッジする目的で活用しております。

これらの買入金銭債権、有価証券及びデリバティブ取引は主なリスクとして、市場リスク及び信用リスクに晒されております。また、貸付金、再保険貸及び未収金については信用リスクに晒されております。

③ リスク管理体制

資産運用リスク管理規程に従い、市場リスクについては、金利変動等に対する健全性指標(ソルベンシー・マージン比率)の影響の程度を定期的に測定することにより管理しております。信用リスクについては、保有する買入金銭債権及び有価証券を信用格付け別に分類し、保有状況を定期的に把握することにより管理しております。また、貸付金、再保険貸及び未収金の信用リスクについては、自己査定実施時に相手先の信用調査を行い、リスクを確認しております。

(2) 金融商品の時価等に関する事項

主な金融資産及び金融負債にかかる貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次の通りであります。

(単位：百万円)

	貸借対照表計上額	時価	差額
(1) 現金及び預貯金	3,336	3,336	-
(2) 買入金銭債権	3,501	3,501	-
(3) 有価証券	30,460	30,460	-
その他有価証券	30,460	30,460	-
(4) 貸付金	874	874	-
(5) 再保険貸	14,268	14,268	-
(6) 未収金	2,899	2,899	-
(7) 金融派生商品	17	17	-
ヘッジ会計が適用されていないもの	17	17	-
ヘッジ会計が適用されているもの	-	-	-
資産計	55,357	55,357	-
(1) 再保険借	7,034	7,034	-
(2) 金融派生商品	309	309	-
ヘッジ会計が適用されていないもの	38	38	-
ヘッジ会計が適用されているもの	270	270	-
負債計	7,344	7,344	-

(注1) 金融商品の時価の算定方法

資産

(1) 現金及び預貯金、(4) 貸付金、(5) 再保険貸、(6) 未収金  
時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(2) 買入金銭債権、(3) 有価証券、(7) 金融派生商品  
3月末日の市場価格等によっております。

負債

(1) 再保険借  
時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(2) 金融派生商品  
3月末日の市場価格等によっております。

## (注2) 保有目的ごとの有価証券等に関する事項

・ 其他有価証券

(単位：百万円)

	種類	取得原価または償却原価	貸借対照表計上額	差額
貸借対照表計上額が取得原価または償却原価を超えるもの	買入金銭債権	1,268	1,284	16
	債券	11,127	11,468	340
	①社債	1,166	1,174	7
	②外国証券	9,960	10,293	333
	その他の証券	1,102	1,110	7
貸借対照表計上額が取得原価または償却原価を超えないもの	買入金銭債権	2,293	2,217	△76
	債券	15,604	15,035	△569
	①社債	14,104	13,543	△560
	②外国証券	1,500	1,491	△8
	その他の証券	3,213	2,641	△571
合計		34,610	33,757	△852

有価証券の減損処理を実施し、107百万円の有価証券評価損を計上しています。

## (注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の決算日後の償還予定額

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
現金及び預貯金	3,336	-	-	-	-	-
買入金銭債権	-	-	-	-	-	3,562
有価証券	1,200	-	1,600	2,500	-	3,300
その他有価証券のうち満期があるもの	1,200	-	1,600	2,500	-	3,300
貸付金	816	-	-	-	-	-
再保険貸	14,268	-	-	-	-	-
未収金	2,899	-	-	-	-	-
合計	22,519	-	1,600	2,500	-	6,862

## (3) 金融商品の時価の適切な区分ごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に用いたインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：同一の資産又は負債の活発な市場における（無調整の）相場価格により算定した時価

レベル2の時価：レベル1のインプット以外の直接又は間接的に観察可能なインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：重要な観察できないインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

## ア. 時価をもって貸借対照表計上額とする金融資産及び金融負債

(単位：百万円)

区分	時価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
買入金銭債権	-	-	3,501	3,501
有価証券	2,773	23,713	2,790	29,277
その他有価証券	2,773	23,713	2,790	29,277
社債	-	12,932	1,786	14,718
外国証券	-	10,781	1,004	11,785
その他	2,773	-	-	2,773
デリバティブ取引				
通貨関連	-	17	-	17
資産計	2,773	23,730	6,292	32,796
デリバティブ取引				
通貨関連	-	309	-	309
負債計	-	309	-	309

(\*)一部の投資信託について、「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号 改正2021年6月17日）第24-9項を適用し、投資信託の基準価額を時価とみなしており、当該投資信託については上記表に含めておりません。

イ. 時価をもって貸借対照表計上額としない金融資産及び金融負債

(単位：百万円)

区分	時価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
現金及び預貯金	3,336	-	-	3,336
貸付金	-	-	874	874
再保険貸	-	-	14,268	14,268
未収金	-	-	2,899	2,899
資産計	3,336	-	18,041	21,377
再保険借	-	-	7,034	7,034
負債計	-	-	7,034	7,034

ウ. 時価の算定に用いた評価技法及びインプットの説明

(i) 買入金銭債権

買入金銭債権は、取引金融機関から入手した価格を用いて評価しております。

入手した価格に使用されたインプットには、重要な観察できないインプットを用いているためレベル3の時価に分類しております。

(ii) 有価証券

有価証券については、活発な市場における無調整の相場価格を利用できるものはレベル1の時価に分類しております。上場リートがこれに含まれます。公表された相場価格を用いていたとしても市場が活発でない場合にはレベル2の時価に分類しております。

相場価格をもって時価としている債券以外の債券は、取引金融機関から入手した価格を用いて評価しております。これらの価格は重要な観察できないインプットを用いているためレベル3の時価に分類しております。

(iii) 貸付金

代理店支援貸付は、返済期限を設けておらず、返済見込み期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額と近似しているものと想定されるため、帳簿価額を時価としております。

一般貸付はすべて短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。なお、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する貸付金については、直接減額前の帳簿価額から貸倒見積高を控除した額を時価としております。これらの価格は重要な観察できないインプットを用いているためレベル3の時価に分類しております。

(iv) デリバティブ取引

デリバティブ取引はすべて公表された相場価格を用いてはいるものの市場が活発でないためレベル2の時価に分類しております。

エ. 時価をもって貸借対照表計上額とする金融商品のうちレベル3の時価に関する情報

(i) 期首残高から期末残高への調整表、当期の損益に認識した評価損益

(単位：百万円)

	買入金銭債権	有価証券	合計
	その他有価証券	その他有価証券	
	住宅ローン 信託受益権	社債	
期首残高	3,837	1,823	5,661
当期の損益又はその他の包括利益	△58	△33	△91
損益に計上(*1)	-	-	-
購入、売却、発行及び決済による変動額(純額)	△277	1,000	722
レベル3の時価への振替	-	-	-
レベル3の時価からの振替	-	-	-
期末残高	3,501	2,790	6,292
当期損益に計上した額のうち貸借対照表において保有する金融商品の評価損益	-	-	-

(\*1) 損益計算書の「資産運用収益」及び「資産運用費用」に含まれております。

(ii) 時価の評価プロセスの説明

当社は、資産運用部門にて時価の算定に関する方針及び手続を定めており、これに沿って時価を算定しております。算定

された時価は、リスク管理部門にて、時価の算定に用いられた評価技法及びインプットの妥当性並びに時価のレベルの分類の適切性を検証しており、時価の算定の方針及び手続に関する適正性が確保されております。また、第三者から入手した相場価格を利用する場合においては、利用されている評価技法及びインプットの確認や類似の金融商品の時価との比較等の適切な方法により価格の妥当性を検証しております。

(iii) 重要な観察できないインプットを変化させた場合の時価に対する影響に関する説明

住宅ローン信託受益権の算定で用いている重要な観察できないインプットは、倒産確率、倒産時の損失率及び期限前返済率であります。これらのインプットの著しい増加（減少）は、それら単独では、時価の著しい低下（上昇）を生じさせることとなります。一般に、倒産確率に関して用いている仮定の変化は、倒産時の損失率に関して用いている仮定の同方向への変化を伴い、期限前返済率に関して用いている仮定の逆方向への変化を伴います。

- (4) 「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号 改正2021年6月17日）第24-9項を適用し、投資信託の基準価額を時価とみなす投資信託  
「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号 改正2021年6月17日）第24-9項を適用し、投資信託の基準価額を時価とみなす投資信託については、(3) 金融商品の時価の適切な区分ごとの内訳等に関する事項の開示を行っておりません。当該投資信託の貸借対照表における計上金額は977百万円であります。

投資信託財産が不動産である投資信託の期首残高から期末残高への調整表  
(単位：百万円)

	その他有価証券	合計
期首残高	755	755
当期の損益又はその他の包括利益	6	6
損益に計上	-	-
購入、売却、発行及び決済による変動額（純額）	215	215
期末残高	977	977
当期損益に計上した額のうち貸借対照表において保有する金融商品の評価損益	-	-

4. 有形固定資産の減価償却累計額

有形固定資産の減価償却累計額は576百万円であります。

5. 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務

関係会社に対する金銭債権の総額は25百万円、金銭債務の総額は345百万円であります。

6. 繰延税金資産及び負債の発生の主なる原因別の内訳

繰延税金資産の総額は3,707百万円、繰延税金負債の総額は121百万円であります。繰延税金資産のうち評価性引当額として控除した額は1,518百万円であります。

繰延税金資産の発生の主なる原因別内訳は、繰越欠損金954百万円、危険準備金967百万円、IBNR 備金448百万円、退職給付引当金307百万円であります。

繰延税金資産から評価性引当額として控除された額のうち、税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額は954百万円、将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額は385百万円であります。

繰延税金資産から評価性引当額として控除された額の主なる変動の理由は、危険準備金144百万円、IBNR 備金59百万円であります。

税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額は次の通りです。

(単位：百万円)

	3年以内	3年超 6年以内	6年超	合計
税務上の繰越欠損金（※1）	510	427	16	954
評価性引当額	△510	△427	△16	△954
繰延税金資産	-	-	-	-

(※1) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

当年度における法定実効税率は28.00%であり、法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異の主要な内訳は、評価性引当金5.78%、交際費の損金不算入3.60%、住民税均等割2.08%になります。

当社は、2023年1月1日より、楽天グループ株式会社を通算親会社とするグループ通算制度を適用しております。これに伴い、法人税及び地方法人税並びに税効果会計の会計処理及び開示については、「グループ通算制度を適用する場合の会計処理及び開示に関する取扱い」（実務対応報告第42号 2021年8月12日）に従っております。

7. 関係会社の株式は205百万円であります。

8. 保険業法施行規則第73条第3項において準用する同規則第71条第1項に規定する再保険を付した部分に相当する支払備金（以下「出再支払備金」という。）の金額は37百万円であり、同規則第71条第1項に規定する再保険を付した部分に相当する責任準備金（以下「出再責任準備金」という。）の金額は23,029百万円であります。

9. 1株当たりの純資産額は564,887円26銭であります。

10. 平成8年大蔵省告示第50号第1条第5項に規定する再保険契約に係る未償却出再手数料の当期末残高は8,060百万円であります。

11. 退職給付に関する事項は次のとおりであります。

(1) 採用している退職給付制度の概要

当社は退職一時金制度の改定により、2014年6月1日時点で在職する支給対象者について、支給額を確定し、退職時に支給するものとしております。

当社では、社員の退職給付に充てるため、退職一時金制度を採用しております。退職一時金制度(非積立型)では、退職給付として、勤務期間に基づいた一時金を支給しております。

なお、一部の制度については、退職給付債務の算定にあたり、簡便法を採用しております。

(2) 退職給付引当金並びに退職給付費用の処理方法

① 退職給付見込み額の期間帰属方法

当社では、退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込み額を当期までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。

② 数理計算上の差異の費用処理方法

当社では、数理計算上の差異は、発生時における社員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(5年)による定額法により案分した額を、それぞれ発生翌事業年度から費用処理することとしております。

(3) 確定給付制度

① 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

期首における退職給付債務	889百万円
勤務費用	145百万円
利息費用	8百万円
数理計算上の差異の発生額	△87百万円
退職給付の支払額	△74百万円
その他	14百万円
期末における退職給付債務	895百万円

② 退職給付債務と貸借対照表に計上された退職給付引当金の調整表

非積立型制度の退職給付債務	895百万円
未認識数理計算上の差異	203百万円
退職給付引当金	1,098百万円

③ 退職給付に関連する損益

勤務費用	145百万円
利息費用	8百万円
数理計算上の差異の費用処理額	△20百万円
その他	△4百万円
確定給付制度に係る退職給付費用	127百万円

④ 数理計算上の計算基礎に関する事項

期末における主要な数理計算上の計算基礎は次のとおりであります。

割引率 1.4%



2023年度 { 2023年4月1日から  
2024年3月31日まで } 損益計算書

(単位：百万円)

科 目	金 額
経常収益	49,335
保険料等収入	47,143
保険料	36,613
再保険収入	10,530
資産運用収益	2,102
利息及び配当金等収入	1,155
預貯金利息	0
有価証券利息・配当金	1,108
貸付金利息	8
その他利息配当金	37
有価証券売却益	947
その他経常収益	89
その他の経常収益	89
経常費用	47,225
保険金等支払金	23,000
保険金	4,280
給付金	8,108
解約返戻金	92
その他返戻金	67
再保険料	10,452
責任準備金等繰入額	2,952
支払備金繰入額	281
責任準備金繰入額	2,670
資産運用費用	309
支払利息	1
有価証券評価損	107
有価証券償還損	1
為替差損	197
貸倒引当金繰入額	1
事業費	17,191
その他経常費用	3,772
税金	1,641
減価償却費	1,906
退職給付引当金繰入額	126
その他の経常費用	98
経常利益	2,109
特別損失	517
固定資産処分損	497
価格変動準備金繰入額	19
貸倒損失	0
税引前当期純利益	1,592
法人税及び住民税	870
法人税等調整額	△168
法人税等合計	701
当期純利益	891

## 注記事項

(損益計算書関係)

1. 関係会社との取引による収益の総額は414百万円、費用の総額は4,019百万円であります。
2. 有価証券売却益の内訳は国債等債券34百万円、外国証券909百万円、その他の証券2百万円であります。  
有価証券評価損の内訳はその他の証券107百万円であります。
3. 支払備金繰入額の計算上、差し引かれた出再支払備金戻入額の金額は21百万円、責任準備金繰入額の計算上、差し引かれた出再責任準備金戻入額の金額は3,894百万円であります。
4. 1株当たり当期純利益は33,610円66銭であります。
5. 再保険収入には、平成8年大蔵省告示第50号第1条第5項に規定する再保険契約に係る未償却出再手数料の増加額6,608百万円を含んでおります。  
再保険料には、平成8年大蔵省告示第50号第1条第5項に規定する再保険契約に係る未償却出再手数料の減少額4,161百万円を含んでおります。
6. 関連当事者との取引は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

属性	会社等の名称	議決権等の所有 (被所有)割合	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額	科目	期末 残高
親会社の子会社	楽天銀行(株)	なし	金融商品関連の取引	貸付金の実行	74	貸付金	816

(注) 上記取引については、市場実勢を参考に、当社の資産運用方針に基づき決定しております。